

第4回次世代教育ICTの在り方に関する有識者会議議事録

日時：令和7年5月29日（木曜日）午後1時から午後3時まで

場所：大阪市役所 5階 特別会議室

出席者：佐藤座長（web参加）、岩崎様（web参加）、衣川様（web参加）、木村様（web参加）、高岸様、中島様（web参加）、松浦政策推進担当部長、富山総合教育センター所長、田中教育DX推進担当課長、瀬脇初等・中学校教育担当課長、富山総合教育センター首席指導主事

【田中課長】

それでは定刻となりましたので、ただいまから第4回次世代の大阪市学校教育のICTのあり方に関する有識者会議を開催いたします。私は本日の進行をさせていただきます、教育委員会事務局教育DX推進担当課長田中でございます。よろしくお願いいたします。

この会議は、次世代の大阪市学校教育ICTのあり方について検討するにあたり、外部の有識者のご意見またはご助言を求めることとして開催させていただくこととしております。

本日は、高岸様におかれましては、現地でご参加いただいております、佐藤座長、岩崎様、衣川様、木村様、中島様におかれましてはオンラインでご参加をいただいております。

また、木村様におかれましてはご予定がございまして、途中でご退席される予定と伺っております。

なお、本日の会議の様子につきましては録画を行っております。録画をした動画につきましては、後日、会議資料と合わせて本市のホームページに掲載させていただき、会議録を作成次第、動画と入れ替えさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、会議の開催にあたりまして、多田教育長にご挨拶をいただきます。教育長よろしくお願いいたします。

【多田教育長】

教育長の多田でございます。本日は皆様、本当にお忙しいところお集まりをいただきありがとうございます。皆様方におかれましては、前回5月15日の第3回までの間に本当に活発なご議論を賜りました。また、南中学校への学校視察にもおいでいただきまして、大阪市の学校の様子をご覧いただき、感謝申し上げます。本当にありがとうございます。実は前回、私、議会の方の本会議が重なりましたもので欠席をさせていただきましたところですが、その際、あの岩崎先生、高岸先生、中島先生から、常にあの貴重なご提言をいただきました。本市におきましても、今後の方策を考えていく上でも貴重な機会になったと考えております。これまでの皆様方のご提言をもとに、意見交換をしていただけるということで、さらに議論が深まっていくように考えてございます。どうぞよろしくお願いいたします。

重ねて恐縮なんですけれども、実は今日も議会がございまして。途中で退席をさせていただきましても、本日の様子につきましては、しっかりと拝見をさせていただきたいと思っております。お願いします。今日も様々、有意義なご意見をいただけたらと思っております。どうぞよろしく願いをいたします。

【田中課長】

ありがとうございました。

続きまして、前回岩崎様、高岸様、中島様からいただきましたご提言につきまして、まとめ資料を作成しましたので共有させていただきます。また、本日の意見のまとめのご参考として、第2回でご提言いただきましたお2人のものも合わせてご提供させていただいております。なおいただきましたご提言をまとめたものでございますし、詳細のご説明は省略させていただきます。後ほどご一読いただければと存じます。お願いいたします。

続きまして、今回の会議内容についてご説明いたします。今回はこれまで有識者の皆様にいただきましたご提言につきまして、佐藤座長にもご意見をいただきながら、皆様のご提言のまとめ資料のたたき台を事務局で作成させていただきました。まずは事務局からこのたたき台についてご説明させていただいた後、皆様からの意見交換のお時間を設けたく存じます。

それではまとめ資料につきましてご説明申し上げます。資料の構成といたしましては、本会議の趣旨として1ページ、2040年ごろの社会の将来像の予想として1ページ、その将来像において求められる教育内容として1ページ、その教育内容を実現するために必要な環境仕組みとして1ページ、最後に有識者からのメッセージとして1ページの合計5ページとしております。その間、皆様からいただきましたご提言の中からピックアップし、共通するテーマに分類して記載しております。

それでは資料1ページ目でございます。

本会議の趣旨といたしましては、第1回で佐藤座長からご説明がありました通りでございますので、説明は割愛させていただきます。

2ページ目をご覧ください。

2040年頃の社会の将来像として、少子化、多様化、社会人の働き方、疫病や災害の激甚化、テクノロジーの進化・普及などにより、公教育の前提条件が大きく変わってきたと認識すべきであり、教育の本質を見失うことなく、変わる教育の前提条件を受け入れる必要がある。また、テクノロジーが社会インフラとなった時代、ウィズテクノロジー時代を生きるという覚悟を再確認する必要があるとしております。こちらは昨年の総合協議会議で佐藤座長からいただきましたご提言から記載しております。

3つのメガトレンドとその概要を表として記載しております。

その1、人口動態の変化としまして、2040年の日本の人口は1億1000万人程度、2065年には1億人を切っている状況。若年層は現在の約6割までに減少。2023年の出生数は約72万人、2035年には60万人割れ、2050年には50万人割れという予測。その結果、学校統合が加速、オンライン、動画授業が当たり前としております。

その2、気候変動の変化としまして、地球温暖化、開発による環境破壊が進む。移民・難民

の増加、特に日本の高齢化・労働力不足も相まって、多様な背景を持つ人々が流入し多文化共生・多言語対応の強化が急務。日本語指導が必要な児童生徒は年々増加。進学率も低く教育格差の浮き彫りに。その結果、カリキュラムや教育方法の抜本的強化に着手。災害や社会の不安定化に対応するレジリエンス教育が必要としております。

その3、教育価値観の変容としまして、現在のスマホの保有率は小学校高学年 6割、中学生 8割、所有開始年齢 10.6歳となり、テクノロジーの進化が加速。AI技術の進展に伴い、教育の重点が知識から価値創造・ウェルビーイングへシフト、標準化された一斉事業から、個別最適な学びと探究的・協働的な学びへ。AI時代の要請。その結果、対話や協働を通じたコミュニケーション重視の教育、プロジェクトベースドラーニングのような探究的な学びの形態を積極的に取り入れていく必要性。人生 100年時代、答えはない、無数にある時代へ。その結果、学校が聖域ではなくなる。社会、産業、学問、自治体等との連携が重要となり、学ぶ≒未来を創る≒働く≒生きるの時代としております。

3 ページ目、教育内容をご覧ください。

まず、デジタル基盤を前提とした教育内容の充実としまして、AIドリル等による個別学習の普及、深い学びとの連携、深い学びについてはPBLなどを通じ実現する。多文化共生教育プログラムを多様化し、急増するニーズへの対応。日本語学習の提供も含め、より一層進めていく。例として、公立校のインターナショナル化。ICTの積極的な活用、情報セキュリティ、子どもたちの心身の発達。リアルなコミュニケーションとデジタルコミュニケーションを組み合わせる。テクノロジーの発達段階を踏まえた活用。徹底したデジタルリテラシー教育の拡充。

ICTで作成したカレンダーや学習計画表を用いて子ども自身が予定管理を行う。主体的に生活をコントロール、管理することで、子どもが学習を振り返りながら学び、自己調整できるようにする。STEAM教育の遊び場を設け、誰でも気軽に訪れ遊べる場の提供。好奇心、決まった正解がないオープンエンドなプロジェクト、挑戦・失敗できる環境、創造性、ワクワクを大事としております。

次にカリキュラム教育方法としまして、必修の範囲が縮小し、科目や先生を選んで学べる選択科目が充実。子どもたちが自分で選ぶ機会を作り、責任を持って取り組む姿勢を養う。「総合的な探究の時間」等が拡充され、PBL型授業が約半数に。対話や協働を通じたコミュニケーション重視の教育を実現させる。教育課程の最大アレンジ。2040年は教育課程が今以上に自由度が増していると仮定し、総合から部活動への連続した時間を確保するとしております。

最後にその他教育の役割、学習内容の評価方法等としまして、教員の役割が「指導的視点」から、外部と児童生徒の関係をサポートする「伴走的支援」に変化。活動拠点が分散することで、児童生徒の活動集約のためのデータ蓄積、分析の必要性が増大。探究学習を通じた学習内容のパフォーマンス評価により、過程を含めて評価。学習内容がデジタルデータで蓄積され、入試等も蓄積データの過程を評価。教員のティーチャープレナーシップ育成としております。

4 ページ目、教育の環境仕組みをご覧ください。

学習環境・自己調整の環境・仕組みの整備としまして、子どもたちの状況に最適な環境を選択することができる学習環境整備。自分の感情を最適な学習に持つていくためにどうすればいいのかということの支援を行う環境づくり。これからの探究モデルを創る。知を受け取るだけでなく知を創り出すことができる環境づくり。例として、STEAMの遊び場としての学校図書館等へのファブラボの設置等としております。

次にデジタルを前提とした環境仕組みの整備としまして、教育データ基盤が整備され、学校ではなく学習者中心のデータ管理形式。個人に紐づくデータ管理を実現する。例として、LMSの導入、校務データの整備等。ICTで作成したカレンダーや学習計画表を用いて子ども自身が予定管理。主体的に生活をコントロール、管理することで、子どもが学習を振り返りながら学び、自己調整できるようにする。教員不足は継続も、AIや映像による校務支援や授業支援が当たり前。AI・映像の導入・活用を進めていく。例として、生成AIの教育・校務利用、動画補助教材の導入、教員のナレッジ共有を目的としたマニュアルのチャットボット化としております。

最後に学校外との連携環境の整備としまして、多彩な専門家とのマッチングを行う事務局の設置。専門家の事務負担の軽減・コーチング観点での監督を行うための環境づくり。学校統廃合が進み、多様な人々が集い学ぶ地域共創型ラーニングハブ。多様な学びの機会を提供する。学びのトライアングルで子どもたちの学習をサポート。親・社会・学校それぞれの立場でのサポートにより子どもの学習環境を確立させる。保護者へのデータ共有等。中学校NEO部活動・社会実装型総合教育。NEO部活動での専門スキル、総合学習時に学んだスキルを相互に発揮し、相互的な学びの展開、社会実装をめざすとしております。

最後に5ページ目、有識者からのメッセージをご覧ください。2040年の日本、大阪市は、人口減少・気候変動により労働人口の減少、多様な背景を持つ人々が流入し、多文化共生・多言語対応の強化が急務となり、カリキュラムや教育方法の抜本的強化が必要な社会が予測される。

将来を担う子どもたちに必要な教育内容のキーワードは、「自己調整」「創造性（つくる喜び）」「探究的な学び」であり、これが子どもたちの「ウェルビーイング」につながる。ICTは目的ではなく、より良い学び、豊かな人間関係、そしてより良い地球環境を築くための手段という位置づけ。それらを実現させるためには以下の環境・仕組みが必要となる。子どもたちが最適な環境を選択することができる学習環境・自己調整環境の整備。デジタルを前提とした環境・仕組み。探究学習を通じた学習内容の蓄積・分析・評価。学校内だけでなく、学校外との連携により、多様な学びの機会の提供が可能となる。そのためには、教員の役割の転換、コーディネート役や伴走者的視点が求められる。予測不可能な未来に対応するには、遊びと学びを通してワクワクを、おもしろがる姿勢、世界にOMORO!!を発信する大阪となることが求められるとしております。

たたき台についてのご説明は以上でございます。

それでは恐れ入ります。佐藤座長、進行につきましてよろしく願いいたします。

【佐藤座長】

ご説明ありがとうございました。

これまで3回議論してきました、今日が一応最後の会議という形になります。皆様からいろいろなご意見をいただき、事務局にエッセンスとして、たたき台としてまとめていただいたところ。この後、ここでの取りまとめを、大阪市のICTビジョンに提言という形でまとめていく形になります。それを持って実現できるような形で、予算も含めてHowの部分につなげていくのかなと思っておりますが、今日はこの取りまとめを受け、皆様からのご意見が不足がないとか、全体を俯瞰して本当に2040年を見越したバックキャスト型として足りているか十分かという点をもう一度、理解したいなと思っております。

皆さんからご意見いただいたところなんですけれども、私の意見はこの会議が始まる前の総

合教育会議で申し上げた点があって、皆様にご了承されていないところがあるかもしれないので、少しだけ補足したいと思います。

ここは大丈夫そうかなと思うんですが、社会の将来像の部分に関しても、デジタルの進展のあたりとか、IT 技術の普及のあたりとかを付け加えさせていただき、この1ページ目に関しては問題ないですかね。2ページ目に関しての教育内容の部分ですけれども、公立校のインターナショナル校化というのはなんか唐突に見えるかもしれませんが、南中学校へ訪問した際に高岸さんのお言葉をキーワードにさせていただいたというところです。約5割ぐらいですかね、外国ルーツの子供たちがいる中、ある意味、言葉が過激ですが、崩壊してるんじゃないかということをし少し懸念してみたところがあるんですけれども、高岸委員の娘さんがインターナショナルの学校を通ってるということもあり、ある意味羨ましいなという言葉が出てきており、なるほど、そういう見方があるんだと。逆に大阪市の特徴をポジティブな形で取り上げていくというその発見の仕方もあるんだということから、少しこういうキーワード入れさせていただきました。

それと、発達段階を踏まえた点とか、あとデジタルリテラシーの拡充というのはもう言わずもがなだと思いますので、少し抜け漏れがないような形であえて入れさせていただきました。こういった基盤的な、基本的な取り組みとともに、少し先進的な取り組みというのは、入っていかないといけないのかなという点で、発達段階を踏まえたとか、あとはデジタルリテラシーの拡充は本当に必須だと思いますので、口うるさいぐらい入れていってもいいのかなと思っています。

それと、後半にティーチャープレーナーという言葉が出てくるんですけれども、初回にご提示した前回のICTビジョンのところから振り返ると、ティーチャープレーナー、アントレプレナーシップの中の一つの造語として、教員がやりたいことを実現していくというアントレプレナーシップの先生版というふうに考えていただければいいと思うんですけれども、どうしても保守的な形になったり、先生の意識は変わらないという意見がかなり多く、またある意味、変革のボトルネックなんじゃないかとも言われるくらいこの先生たちの意識というのはよく取り上げられるんですけれども、やはりリスクを取ってチャレンジする、変革を恐れずにチャレンジしていこうとされるその姿や行動に対して、やはりあの賞賛するような文化であるべきだなというふうに思っています。全員がティーチャープレーナーシップ、アントレプレナーシップを取るということではないと思うんですけれども、そういう形で取っていらっしゃる先生に対して、賞賛を与えるようなスタンスという形から、こういったキーワードを入れさせていただいております。

続いて教育の仕組みの方ですけれども、デジタルを前提としたという真ん中の部分ですけれども、個人に紐づくデータ管理、皆さんからのお話の中からも、やはりデータに基づく個々の見取りというものは必須とされています。もちろん国でもですね、この教育データ利活用の部分でデータの標準化、どうやるんだというところについては、本当にもう4年越しでやってるんですけれども、この民間を交えた形でのデータ標準というのは、なかなか一筋縄ではいかないところもあり、もちろん国の動きもみつつ、大阪市の中で、個人に紐づくデータという管理がこういった形でできるのかという議論も含めて、学習者中心のデータ管理をどうするのかということを考えていくということとはとても重要なことになるのかなと。その上で、LMS と書いてるんですが、学習データ、また校務データの管理になってくるわけですが、学習データというのはまさに、木村先生がおっしゃっている自己調整学習につながるようなLMSですね。ラーニングマネジメントシステム、自分のデータを可視化して、自分の気づきにつなげていくというような、そういったことを端的に申し上げたくて、古い言葉かもしれませんが

ども、LMSという言葉を使わせていただいております。

それと動画教材の話も多く出てきておまして、その中でも動画の補助教材の導入とか、また教員のナレッジ共有を目的とした生成AIを活用したノートブックLMのようなものなんですけれど、別に40年を見越さなくてもナレッジ共有などを生成AIを活用したり、そういったものにどんどんデジタル化していくということも例としてあるんだろうなということで、この辺を加えております。

あとは一番下の部分で言うと、特に高岸委員が強調されてたように思うんですが、保護者へのデータ共有という点も今回入れています。

全体を通してデジタル基盤をしっかり整え、社会と連携する開かれた学校にしつつ、学習者の自律性とわくわくというものを促進していくような学校の形というのは、おぼろげながら見えてくるのかなっていう感じはいたしますが、ここから少し皆様からの意見をいただきたいんですけども、あの言い足りてないとか少しこの辺のニュアンスが違うとか、そういったことがありましたら、ご意見いただければなと思っています。どなたからでも結構です。

時間もありますので、お一人ずつちょっとご意見いただきたいと思うんですが、お話しされたいという方いらっしゃいますかね。

【高岸代表】

まとめていただいた資料を拝見して、あの評価のところがあんまり書かれていないかしらと思ったんですけども、2040年、このようにICTを使っていこうとなったときに、先生方の評価にどう影響するのかとか、子どもたちが活用したら、またしなかったらどういう評価になるのかとか、親がそのあたりをガイドしなかったらどうなるのかとか、そのあたりの評価もセットで考えなきゃいけないかなというふうに思いました。

あと、あのポジティブな視点でもう一つあるかなと思ったのが、2040年ともなると、今って先生方の中にもともとデジタル使ってなかったから教えるに困るっていう方もいらっしゃるのかもしれないですけど、そういう先生方は自然に少なくなるだろうなと思ったので、今よりも難しさはなくなるんじゃないかなと思ったところもございます。外国人率の話もなんか調べると、静岡とかも70%の学校とかもあるんですよ。となると、そういう学校が特色を持って、これから公立、私立ってあまり関係なくなっていくということも踏まえると、日本に優秀な若者が集まってくるというような可能性も秘めているのかなと思いますので、そういう見方もAI翻訳を使えば、世界中の子どもたちが別にオンラインでも対面でも一緒に学んでいくことができる可能性があるというのは、ぜひ2040年に向けて伸ばすのも良いかなと思いました。

あと、ご相談させていただいている、提言をまとめた時に、ちゃんとそれが市民の皆さんに伝わらないと意味がないと思うんですね。こういうふうに教育委員会の方たち、有識者の人たちが考えてくれるんだな、子どもたちの教育の未来をというふうに伝えていくために、今ここで開催してる万博はすごくいい場所だと思いますので、例えば、私たちが担当するシグネチャーイベントとかもございますので、ぜひ活用していただいて、せっかくここで先生方と取りまとめた提言がありますので、あの例えば夏休み、あのお子さんとかが親御さんと来るタイミングですよ。

今ってちょうど平日は修学旅行の方たちでいっぱいなんですけれども、そこでは先生方にお伝

えすることできると思いますし、夏休みだったらご家族で来ることが多いと思いますので、子どもたちを集めて親御さんにも聞いていただいとということが、私はできたら嬉しいなと思っております。以上です。

【佐藤座長】

ありがとうございます。今のところで事務局何かありますか。

【田中課長】

事務局の田中です。1点目、趣旨のご確認なんですけども、評価のところなんですけども、資料の3スライド目、右下に教員の役割・学習内容の評価方法等というのを記載しておるんですけども、おそらくここへの盛り込みが足りてないのではないかとご指摘で受け止めました。その上でご確認なんですけど、評価と言いますのがどういうシステムの評価になるのか、例えばで考えますと、教員の人事の評価と言いますか、働きぶりの評価みたいな形で使うことが多いんですけども、そういう評価項目の中に、こういった未来を見据えたICTの活用ができてるといような観点が必要だというご趣旨でよろしいでしょうか。

【高岸代表】

そのような事務的な評価もそうだと思うんですが、こういう教育をしたら国民からこう思われるとか、今はすごくいろんな視点があって、全部がいいというわけでも悪いというわけでもなくて、何かこう突出したら、その逆を言う人もいると思うんですけども、この2040年はみんながこういうふうに使っていくといいんじゃないかという評価の指標になるようなこと、それは先生方の人事に関わるところだけじゃないかなというふうに思います。

世論でマスコミとかがどういうふうに報道したら、どういうふうに動いていくとかも、結構簡単に変わってしまったりもするので、それはマスコミ対策とかも含めて、ビジョンを作っていくというのも大事ではないかなと思います。

【田中課長】

成果指標みたいなイメージですかね。その事後的に検証する時に結果を図ることができるような指標というイメージですかね。

【高岸代表】

そうですね。もう少しあのいろんな人が見た時に想像がしやすいものかなと思います。先生方の中だけの話じゃなくて。イメージ伝わりますでしょうか。

【田中課長】

対外的に大阪市としてこういう取り組みました。こういう効果が出ましたということ発信をしていくべきとか、そういうことでしょうか。

【高岸代表】

発信をしていくべきだとも思うんですけども、こういう活用のされ方が素晴らしいというように、それは誰が見てもわかりやすいというか、それは、例えば親の視点で見た時にわかりやすくする。今はそれが無いと思うので。

【佐藤座長】

そうすると、これをより社会に伝わるような形で、資料を漫画にしていくとか動画にしていくとか、例えばそういうイメージですかね。

【高岸代表】

そうですね。

【佐藤座長】

一定の評価を、評価というと定量評価みたいなこととかですね、ビフォーアフターみたいなことを、その学習者においても、先生においても、またこの施策においても、あの問われることがあって、この場ではその例えば定量的な目標とかをここで設定するのもありなんですけど、今の段階では難しいのか、もっと詰めていかないと難しいのかなってところがあるので、抽象的なベクトルというか方向性を指してるんですけども、それが社会に認めもらえるような形で発信していこうという、そんなイメージでしょうかね。

【高岸代表】

そうですねはい。

【佐藤座長】

なるほど。

【田中課長】

ありがとうございます。としますと、私どもどうしても、これを 80% にしましょうとか何点みたいな言い方をしがちなんですが、世間から、あるいは親御さんからいいものですよというように評価をいただけるという意味での評価ですかね。

【高岸代表】

そうですね。それに近いと思います。

【田中課長】

するとそういう結果成果をわかりやすく示して、こう社会から評価をもらえるような示し方が必要で、評価してもらえるためにちゃんと示していく必要があるよねというイメージですかね。

【高岸代表】

ありがとうございます。

【田中課長】

その他のところにおそらく入るんだと思うんですが、今入れておりますパフォーマンス評価により過程を含めて評価のところをちょっと膨らませていただいて、高岸さんからいただいた趣旨で記載するというイメージで合っていますでしょうか。

【高岸代表】

ありがとうございます。

【佐藤座長】

そうですね。具体的にちょっとどんな文言が私は今思いつかないんですが、あの少し入れていただくという形で、何かありますか。

【高岸代表】

いえ、すいません。記載されている内容が先生だけの評価だと思ったんです。

【田中課長】

その他のところに教員の役割と書いてるので、そこに限定されてるような印象があるってことですかね。

【高岸代表】

そうですね。

【佐藤座長】

社会からも認められるようなというニュアンスが必要だということですかね。

【高岸代表】

はい。あるといいなと思いました。特に小さい子は先生がいないので、親が先生じゃないですか。そうした時に、今評価がないなと思ったので、それもあるといいなと思いました。

【田中課長】

教育長、次のご予定ございますので、ここで退出させていただきます。恐れ入ります。

【佐藤座長】

一応ここは公教育の改革ということになるので、小学校一年生から高校三年生までみたいなのところが対象にはなるのですが、当然その学校だけじゃなくて、家庭との連携というのにも必要になってくると思いますので、その他のところに社会的な視点というか、社会から認められるようにする、視点を加えるというそんなニュアンスですかね。具体的にどういうワード、どこに入れていったらいいかなというのをヒントもらえればという感じです。評価に関して、ほかの先生いらっしゃいますかね。オンラインでもご意見ある方はいらっしゃいますかね。その他に社会的な視点としての評価であるワードを少し加えるということと、あとは、実際にこれだけ議論をしてきて、大事な話はいっぱいしてきてるつもりではあるので、例えば、その次期 ICTビジョンの方で、最終的に固まった段階で、大阪市の次のビジョンというのは、こういう形でありますよというのを誰でもわかるような、漫画なのか動画なのか、そんな形で社会に発信していくということも大事だということを提言の中に入れていくべきですかね。そうすると、いや、実際にやっていけたらなとは思いますがね。

インターナショナルの部分とか万博で扱ったものに関して、もっとこう触れるとかなんかそのあたりおっしゃってましたけど、その辺でもう少し言い足りないところとかありますか。

【高岸代表】

いえ、大丈夫ですはい。

【佐藤座長】

はい。インターナショナル校化というところについてニュアンスはあっていますかね。

【高岸代表】

はい。

【田中課長】

先ほど高岸様からいただきました、オンラインでも対面でも学習できる状況が未来にはあるよねといった趣旨を、この日本語学習の提供も含め、より一層進めていくというところに、文言は書き出していきこうかなと思います。

冒頭にご案内しておくべきだったんですけど、この場で修正がなかなかできないので、いただいた意見を踏まえて修正させていただき、メールで共有させていただいて、皆さんにご確認させていただいて、確定させていくという形で考えてございますので、ご修正点、ご意見等ございましたら、おっしゃっていただければと思います。よろしく願いいたします。

【佐藤座長】

では中島委員をお願いします。

【中島代表】

ありがとうございます。大変いろいろ私の意見を含めてまとめていただいて、皆様のご意見も入っていて、見ながら結構わくわくする部分もあって、すごくいいまとめだなと思っていました。様々なご指摘もありましたけれども、ただ、よりわかりやすくするとき、これはあくまでできるかどうかなんですけど、果たしてそれが良いかどうかもちよっとわからないんですが、キーフレーズみたいなもの、未来を創る大阪人とかおもしろい未来を創るとか、こういう若者が増えてくるといいなという大阪市としてのものが何かわかりやすいワンフレーズになってくると、より届きやすいかなという印象がありました。今評価の話いくつかありましたけども、私も教育の観点からやっぱり評価というと何か項目があってと思いがちなんですけど、先ほどのお話、なるほどと思っていたのですが、例えばですけど、ちょっと計りづらいし、定量化しづらい、質というかものとして見せるという意味で、例えば想像力という言葉が何回か出てきますけれど、想像力というので、探究のシェアリングをすとかこんなことをやりました、こんなたくさんの探究が生まれましたとか、まずそういうことをみんながやってるってことが見せられる。あと、試行錯誤力とか、いかに失敗も含めてですね、どんな試行錯誤したかみたいなものが見えてくると、先ほどその教員からだけじゃなくてというのもありましたけれど、例えば10代だと多くの場合だと受験とかがあったので、親にしても先生にしても受験というものとかテストの点とかというもので、図ってしまうようなところがあったのかなと。社会も分かりやすいから、それでまず履歴書とか、学校からの何かしらの推薦だったりということもあったのかなと思うんですけど、それが時代が変わっている中で、点数化されづらいものをどう見せていくかというのは、教員だけじゃなくて社会に対しても重要なこと。この間、ポートフォリオドキュメンテーションという海外の言葉になっちゃうけれど、そういうのを出しました

けれど、創造性であるとか試行錯誤であるとか、自分が未来に対してどれぐらい未来を創ることができる自信を持っているかとか、いくつかの項目で、必ずしも定量だけではないけど、定量化に時にできるものとか、数で見せるとかも含めてですね、子どももそうだし、先生自身も、親自身も、学校大阪市全体がどういうところを目指していて、社会に対してどこを発信していくかが見えると自ずとそこに対する評価がついてくるのかなと思いついていました。あといくつかお伝えします。研修のようなものが今後大事なかなと思ってまして、今そこまでそれが書かれてないかなと思うんですけども、先生方の、ある種の新たな研修なのか、探究とか、ICTも初めてやる方にとってはとっつきにくいとか、STEAMとかもよくわからない言葉という印象もあると思うので、心理的にも、あと時間的にもハードルを下げられるような研修のあり方、研修のやり方自体が、従来型だと講師が来て一方的に色々教えてくれて、メモをするタイプの研修も結構あったと思うんですけど、そうではなくなってくると。それこそ予算の付け方とかも含めて変わってくるのかなと思いますので、これから研修とか、場合によっては大人の方々全体に対しても何か遊び場を創るのか、余白的に少し投資して、まるで遊ぶように学ぶことができるとかで、それを授業で使うとなったら大変だけど、何かしらのインセンティブが働くとか、何かそういう仕組みができてくるといいのかなと。そんなことを思いながら聞いてました。あと予算措置で言うと、この間もちょっと言ったように余白的なその先生方の裁量による、購入したりすることができるような予算措置というのを最初は少なくともちょっとずつ始めていただけると、まあ何でもいいというわけではないと思うので、例えば100のリストがあったりとかそれに乗ってないものでも申請する、何かしらの提案書を提案して、これをのために購入したいとかということ認められるとか、多様なニーズに対して公的な立場の学校とかがちょっと遊び的に取り組むことができるような予算措置というのも多少なりとあれば、そんなに大きくなくても、結構できることが増えるんじゃないかなと思ってた次第です。

最後に、先ほどもありました万博の活用、私たちも思います。高岸さんのところもぜひですし、クラゲ感の方もぜひです。実際、大阪府の方は高校生たちがクラゲ館でワークショップを15チームが一先懸命やってまして、プロトタイプも作って、今度も6月14日に桜和高校の方でかなり多くのチームが集まって、最後のプロトタイプみたいな形で、実はもう何チームかは始まっているんですけど、もう一度外側でもやろうということで行っています。もし皆様お時間ある方ぜひいらしていただければと。これは高校生と大学生が中心なんですけれども、ぜひ中学生とか小学校の先生もこれからの学びとかこういうふうになるのかなみたいな、双方向の互換用いて、自分の好きをベースにしたワークショップをクラゲ館で行うべくやってる子たちなので、もしよければぜひ見ていただきたいです。この間も言いましたが、中泉尾小学校は7月25日にクラゲ館でパソコンの解体をベースにしたワークショップをやってくれることになっています。完全に詰まっているわけではないので、あくまで告知までですけども、でもそういう形で自分が提供者、創り手になるという経験も、万博において子どもたち自身がするとそれが大きなモチベーションというか、前に進み出してくるエンジンになるんじゃないかなと思います。そういう形でも、ぜひクラゲ館活用いただきたいですし、今後トークイベントもクラゲ館でも行っていきたいですし、8月には「世界遊び・学びサミット」というのを行ってまして、ネイチャーイベント、未来のこれから学び遊びがどうなっていくのかというのをいろんな立場から、世界の方々と語っていきたくて思っていますので、そういうところでもぜひ子どもたちも巻き込みたいし、先生も巻き込みたいし、あと、例えば大阪市としてこういう風に考えて、こういう未来にしたいんだとことを世界に発信する良い機会でもあると思いますので、いろんな形でぜひこちらからも声かけもさせていただきたいと思います。皆様方からとか、これを見られている方とかからも、こんなことはできないかとかですね、せっかくなので、この機会に万博はめったにあるものじゃないので、もう使い倒すぐらいの勢いで未来の学び遊びに繋げていけるといいんじゃないかなと思いました。また、国際交流イベントもいろいろやって

いこうと思ってまして、いろんな学校と国をオンラインでつないで、お互いのことを知り合うというのを今企画していて、6月7月だけでも5回6回行おうと思っています。今、まだ時間が調整中のものもかなりあるので、決まり次第シェアさせていただいて、まずは緩やかにオンラインだったら、たまたま空いてれば5分入るとかもできるかと思うので、ちょっといろんな国と先ほどからのインターナショナル校化とか、この多様化するってことがある中でも、実際にもリアルに学校が多様化してはいるんですけど、もうちょっと認識していく、いろんな国の人たちの価値観に出会うような機会というか、もっと大阪を中心に広まってくると常に面白いなと思いますので、ぜひそういう機会も皆様と一緒できればと思いました。最後フォローからのこちらの話も含めてですけど、でもぜひあのこういう形で皆さんとこういう議論してきたことが、いざ具体的な形になってくるといいなと思ってます。佐藤さんがキープレーズが来てるので、ぜひ私もちょっと考えてみたいと思います。

【佐藤座長】

ありがとうございます。キープレーズはなんかこんな感じで、なかなかこの中でセンスのある方がいらっしゃるか難しいのですが、入れたほうがわかりやすいですよ。せっかくこうまとめたことですからね。なかなか好き好きがあると思うので、投票的なものでもいいかもしれませんね。評価のところでおっしゃられてましたけど、想像力とか試行錯誤力とか、定量化できないところを中心にするのはこれからすごく重要になると思います。これがこの提言の中に入るかどうか、また別としてなんですけど、例えば市立学校の入試に関しては、こういった想像力や試行錯誤力について、評価基準を独自で決めて、そういうたくさん失敗した人が入る学校とか、そういう出口があるとまた面白いですよ。万博をやった大阪市として新しい取組みたいなことというのもあっていいのかもしれないなと思いました。

それを資料どう入れていいのか、中島さんこう入れたらいいんだというのがあれば教えていただければと思うんですけど。すごい賛同であるものの、さっきの入試まで変えていくというのがなかなか書きにくいところがあるものの、要は創造力や試行錯誤力、要は失敗力を評価して何か出口につなげていく。失敗力は大事だというだけでは簡単に終わっちゃうと思うんですけども、何か政策につながるような、例として入試を申し上げましたけれども、入試はなかなかハードル高いかと思うものの、そういうのがあるといいですね。授業の中に取り入れていくとか、何かそういうことを、そのために先生たちに抽象的な評価というものをどう伝えていくのかということ、少し提言していかないといけないのかなという気がしますね。

あと、研修の話もおっしゃってましたけれども、僕、あのティーチャープレーナーシップというところに関して、ちょっとその研修的な要素も入ってます。研修って先生向けのアプローチっていろいろあると思うんですよ。例えば、全体的に裾野を上げていくというものもあれば、先進的な取組みを積極的にやっていらっしゃる先生方っていらっしゃると思うんですよ。そういう人たちを何らかの権限を与えて全国のその先進事例を見に行くような出張費を出したりとか、持ち帰ってシェアをしたり、また外部の有識者と組んで、先進的な取組みを実証実験として市内でやっていくとか、そういったものをやれる権限を持った方々というのを、チームにして進めていくという方法もあるのかなと思います。なんとなくそういう研修をこのティーチャープレーナーシップ育成の中に入れてたんですけど、ほかに先生向けの研修ってイメージと違う何かありましたかね。似たようなものであれば、そこに少しワードを追加するなり、あの包含するような形にしてもいいかなというふうに思います。親も交えたという話もあったんですけども、2040年どこかのタイミングで大阪市の教育をまとめたイベントみたいなものを、

親も交えて呼ぶとかですね、こういうことを考えて、こういう形で大阪市は独自に進んでいくんですみたいなイベントをやり、親御さんとかも入ってもらおうとか、あとほかの自治体からも見てもらうとか、そういった流れもあるのかなと思いましたね。さっきの国際交流イベントというのもあったけど、例えば、さっきの南中学校のようなある種の国際的なインターナショナルの学校を中心に、例えば、イベントの中にそういうパートがあっても面白いと思いますし、大阪らしいのかなと思いました。事務局に何か確認したいことがありますかね。

【田中課長】

今中島様からいただきましたご意見をふまえた資料の修正のイメージなんですけれども、1点、研修のところについてなんです、おそらく資料に入れるとしますと、4スライド目の環境・仕組みのところ、学習環境・自己調整の環境・仕組みの整備のところの上段に子どもたちの状況に合わせてと記載させていただいているところと、2段目に探究学習モデルというのをいれていますので、ここにもう一つ探究学習であるとか、STEAM学習を進める上での研修の充実と言いますか、そういった形で入れればなと思います。佐藤座長のほうからもございましたように、先進的なところですね、実証的に取り組んで研究するとかですね、そういうところで一つ想定されるのかなと思いました。ここで一旦研修として入れるイメージかなと。もう一点、予算措置のところはですね、STEAMの学び場としての学校図書館等へのファブラボの設置等、ここに入れているイメージでした。そういった、設備、仕組みを入れるとしますと、中島委員がおっしゃってたような予算措置というのは必然的にここに入ってくるのかなと思っておりますので、この二点で入れられるのかなと思っておりますところですが、イメージいかがでしょうか。

【中島代表】

それで大丈夫だと思います。ありがとうございます。

【田中課長】

ありがとうございます。

【佐藤座長】

では木村委員お願いいたします。

【木村准教授】

ありがとうございます。先ほど出てきた研修のところとちょっと結びつくところかなと思っていたんですけれども、やはり教員養成というのはすごく重要なことだなと思います。先生たちが創造性とか、もしくは探究するということの楽しさとか、そういう面白さを感じていないと子どもたちにそういうふうなことを伝えることには繋がらないし、そういうことをどう授業にしていこうかという発想がないと、そういう授業が生まれても来ないと思うんですね。だから

ら研修という教員養成がすごく私は大事なのかなと思うのと、やはりそういうことを体験してきた人が教師になっていくということが、僕はすごく大事なんではないかなと思うんですね。例えば、大学の時代にそういうふうな探究的なところを取り組んできたとか、もしくは自分は卒業研究とか卒業論文を大学でやったりとか、もしくは修士に行っている学生は修士論文とかを書いてると思うんですけども、研究ということも一つの探究というふうなこととつながるような、要するに自分で追求していくということにつながっていくことだろうと思うわけですね。でも、大学で教員養成をみていると、研究というよりは教師になるために、採用試験というところの意識というのが、学生たちは非常に強すぎると思うようなことがたくさんあります。なので、学生たちが大学の時代に探究してきたこととか、もしくは研究してきたことを評価するような採用試験のあり方が僕はすごく大事になってくるのではないかなと。大学とか高校の時代にそういう経験を積み重ねてきた人が、学校の教員になるということで、そういった喜びとか面白さとか追求するということの大切さみたいなものを知った上で、教師になって、そしてそれを子どもたちに伝えていくということがすごく大事なんではないかなと今の話を聞いていて思いました。そのためには、採用試験というものの変革、例えば面接試験の時に大学の中ではどんな探究してきましたかとかどういう研究してきましたかとか、どういうことが明らかになってきましたかというようなことを聞いていくとかというのがまずなのかなと思うわけですね。そういったことを教育委員会が発信することによって、大学教育のあり方というものがちょっと変わってくる、学生たちが探究ということを大事にすることにつながっていくのかなと思ったのがまず一点目です。

もう1点は学習者の自律性という言葉が出ているのと、創造性という言葉がこの資料には出ていると思うんですけども、両方とも私はすごく大事だと思っていて、それを前回の時の私もこう話してしたり、ほかの先生方の話を聞いたりとして、頭の中で整理をしていたんですが、やっぱり自律性というのは、これから学習に向かうという手前にあって、創造性というものが最終的に目指していきたいところかなと。その間に、教科的な学びというものが入ってくるんだろうと思うわけですね。なので、その教科内容を子どもたちが自分で学びながらどう定着していくのかという文言みたいなものも重要になってくるのかなと。その中では、教科を自分で学ぶとか他者とどう関わるのかとか、もしくはAIと伴走していくとか、そういった教科内容の充実性みたいなところが探究とか創造というところの土台、基礎にもなるんだよというような文言が提言の中にあっていいのかなと思ったところでした。

最後に学校の個性という話が出てきたと思うんですけども、先生方がイニシアチブを取れるというようなこととか、学校長がリーダーシップをしっかりと取るとかという学校独自のというふうなところで、学校で働いている人たちが中核になるというか、楽しく自分たちの教育を創造していくというような、そこがすごく重要だなと。先ほどの教員の創造性というところも、学校の先生方が生き活きとしていくということも、校長先生がしっかりとリーダーシップをとりながらというような枠組みというところも少し重要なのかなと思いました。以上です。

【佐藤座長】

ありがとうございます。そうするとさっきの研修、教員養成ですね。この部分については、経験をすることが大事だということから、採用試験をもっと見直すということで。今の採用試験で、学生時代の経験を参考に採用試験というのを行われていないということですね。

【木村准教授】

どうですかね。多分あの私の認識で、学生たちがそう認識しているだけなのか、もしくは大学がそう認識しているだけなのかもしれませんが、採用試験に対するイメージとか、もしくは採用試験の対策とかそういうところを見ていくと、面接とかそういうことはたくさん出てくるかなとは思いますが、その中で場面指導的なこととか集団討論的なこととかということをして学生たちは中心にやってるわけですけども、そこも大事なのかもしれませんが、どんなことを追求してきたのかとか、どんなことを自分で探究してきたのかとか創り出してきたのかということについても、学生たちに問うというか、そういうことも大事にされるべきということが発信されてくると、学生たちのその大学での生活の仕方とか、目指すべき学び方みたいなことがちょっと変わってくるのかなということを感じたということです。

【佐藤座長】

そうですね。全体的にはその自律とか創造性ということは重視してるので、それに合う経験を有するような採用試験の改革とか変革というところまで、例えば大阪市独自の採用試験の実施みたいなことなんですけど、ちょっとハードル高いような気がしますがいかがでしょうか。そこまで入れていたほうがいいですか。

【木村准教授】

資料に書いていただくのは、教育委員会のほうで何か色々あったりするんで、それが難しいかなという面もあるのであれば、入れていなくてもいいかなとは思ったりするところなんですけれども、真面目にコツコツやる学生たちが教師になりたいと思うわけですけども、真面目にコツコツというところが、参考書を見ながらそれをひたすら覚えるとか、こういう時にはこう答えるとか、面接の時にはこういう時はこう答えたほうがいいという練習をして、それは全く意味のないことではないかもしれないとは思っているわけですけども、学生たちが自分たちで創り上げたものを経験しているということに重点を置きながら大学生活を僕は送ってほしいなと思ってますよね。そういうことがもっと評価をされるようになったら、大学のうちにもっと自分なりの研究とかそういうことをしようと思うだろうし、研究をしている学生の方が、自分の強みを持って現場に出られるんじゃないかな、そういうことが子どもたちの新たな創造性を育むような先生たちに成長していってくれるんだなということを感じたということです。

【佐藤座長】

採用もそうなんですけど、例えば若手の先生とかも含めて、おそらくそういった視点で大事だと思うんですよね。さっきのティーチャープレーナリシップという少しいく抽象的な言葉の中に、その辺が包含されていまして、いわゆる何かを変革するという点に関しても、例えば採用された後、今の若手で頑張っているような人たちも、これからは自分たちで経験をもっと積んでいこうとか、社会とつながることをやっていこうとか、創造性とか自律性を大事にするんだというような意識の変わる研修ということが、ある意味ティーチャープレーナーということでもいいのかなと思いました。あとこれ大事だなと思ったのが、自律性、創造性の間のその

教科をどう学ぶかみたいな部分ですね。まさに他者とどう学ぶとか、AIをどう活用するかとかおっしゃってましたけれども、本当にそこだと思ってます。なのでこの辺っていうのは、あの先生もまさにおっしゃっていたカレンダーを用いてとかですね、こういったツール、カレンダーのみならずだとは思いますが、あの最先端のツールも含めて、子どもたちがその自律的に学び方を創造していくというか、自律的に自己調整ができるような振り返り、メタ認知ができるようなツールをどんどん使っていくという、カレンダーという意味には、そのことを包含してるとことでよろしいですよ。

【木村准教授】

ありがとうございます。そのあたりもやっぱり入ってくるかなとは思ってますね。

【佐藤座長】

そうですね。カレンダーのみならずですよ。

【木村准教授】

のみならずというところですね。いろんな教育委員会さまの指導主事の先生方とよくお話をすると、自由進捗とかという自己調整とかという話が出てくるときに、本当に教科的な学びを深めているのかという疑問とか不安の声がたくさん出てくるわけですね。その中で子どもたちが自由進捗で学びながらも、教科内容を深めてちゃんと定着させていけるというような取り組み、考え方が僕はすごく大事だなとは思っているわけで、そこでカレンダーを創るということは、自分から学習に向かっていくという学びに向かう力の部分が大きいのかなと僕は思っているわけですが、そこがしっかり持った後に教科内容も自分自身でどう深めていくのかとか、教科で深めていることからずれないように、自分の知識をどうつけていくのかみたいなところを、AIがサポートして、例えば、この例が適切かわかりませんが、子どもたちが一生懸命学習した時に、ちょっと課題からずれてきてるよねとか、こういうところを深めてみたらとか、もしくはこういうふうなところを考えれば、もっとこのことについては深められるよねみたいなことをAIみたいなものが伴走しながら、子どもたちが自由にそれに聞いていって、そして自分自身でもっと追求していきたい、教科内容を深めていきたい、もしくはそれがどうして知識にしていくのかみたいなところを伴走して、やり方を教えてくれるような教科内容も深めていけるようなツールみたいなものが整備されていくということが、子どもたちの学びをさらに深めていくのではないかなと思ったところでした。

【佐藤座長】

まさにおっしゃっていただいたのは教育データ基盤みたいなところがですね。さっきの自由進捗は放置とは違うわけで、やっぱり個々が自由に学ぶことはとても大事なことですけども、その自律性を備える、育成するという観点でも、教員なり学校の介入というのは大事で、それをどういう形で見るといって、データに基づく進捗管理だし、管理という言葉はあんまり使いたくないんだけど、みとりだと思ってまして、自律性を伴うものと、学校や教育との接点

というものをデータで創るということになってくるのかなと思いますので、それは資料の4ページ目のピンクのあたりがおっしゃってることかなと思います。あと、学校長はリーダーシップを取りというもおっしゃってましたけれども、現状取れない理由があるんですかね。ちょっと気になったんですけど。

【木村准教授】

皆さんに聞いたわけではないのであれですけども、やはりその学校長が難しさを感じておられるということも聞くこともあるわけですね。退職校長とか再任用の先生たちが来られることもあるだろうし、あと地域とか外部の視点とかいろんな要素が学校の中にはあると思うんですけども、いろんな方々のいろんな価値観が学校の中で渦巻くような時代にはなってきているだろうと思うわけですね。その中から、ICTみたいなところの新しい教育を創っていくというところにおいて、学校長がイニシアチブを取れるという、ある意味、一つこうと決めた時に進んでいけるような学校の組織性とか、もしくはその中で理解をしてもらえるような環境づくりみたいなところというのがすごく重要かなと。先生たちの足並みをまず揃えるということに時間がかかってくるということもなきにしもあらずというところがあるので、そういったところを先生たちで共有できるとか、学校のリーダーシップのもとに先生たちが向き合えるようなことが僕は大事なのかなって思ったところでした。

【佐藤座長】

ティーチャープレーナiership、これリーダーシップの一つの形なんですけれども、ティーチャーの中に、学校長リーダーも含めてるといふそんな感じかもしれませんね。それでいけそうな気がしますよね。

【木村准教授】

はい。ありがとうございます。

【田中課長】

事務局からよろしいでしょうか。

【佐藤座長】

ごめんなさい。事務局お願いいたします。

【田中課長】

はい。木村先生からのご指摘踏まえて資料の修正のイメージで改めて確認をさせていただきます。教員の研修とか育成が重要であるというのは、先ほどのお話とも共通しますし、佐藤座長の方

のあったところかと思います。ティーチャープレーナーのところも含めまして、中島さんからもご指摘を踏まえたところもあるので、資料の4ページ目、環境・仕組みのところですね。一番上段に、先ほどSTEAMであるとか探究的な学びを支えるような研修云々という話がありましたけれども、そこにティーチャープレーナーのところも含めて木村先生の方からおっしゃっていただきました内容も含めて、ここに記載するというようなところで修正をさせていただきたいと思います。

もう1点。学校の個性がというところにつきましては、比較的校長の学校内における権限というのは、大阪市の場合は比較的与えているんじゃないかなという認識はございます。だからといって、いくらでもお金が使えるとかいくらでも人を持ってこれる体制になってないのは事実ですし、そういう状況を強化していくのは必要だということも同意いたしますので、そこは先ほど佐藤座長のおっしゃったティーチャープレーナーの中で何か盛り込めるところがあるかどうかも含めて、検討させてください。あと2点目にございました学習者の自律性、創造性の間の教科的な学びという点ですけども、木村先生のご趣旨としては資料の修正が必要だっというご指摘でしょうか。

【木村准教授】

資料の中で、創造性とか自律性という言葉の中に、教科の学びの充実みたいな言葉が確認できなかったのも、自律的に教科学習を学びながら、さらに探究して創造できるような人材になっていくという一つとして、教科という言葉も中に入ったほうがいいのではないかなと思ったということです。

【田中課長】

3ページ目の右上のところの木村先生からのご提言を踏まえて、事務局として入れさせていただいた部分で、今日木村先生からご意見いただいている点も、1回目の時にご提言でご発言いただいた中であつたんだろうと思います。事務局としてまとめるときに、その部分が落ちてくるのかなという印象もございまして、非常に申し訳ないんですけども、木村先生の方ですね、他の項目と同じようなボリューム感と言いますか、この黒丸に矢印みたいな形ですね、5、6行ぐらいになっても構わないんですけども、そのところを木村先生の当初のご提言に合わせてご修正していただくことはできませんでしょうか。

【木村准教授】

わかりました。書かさせていただきます。

【田中課長】

すみません。こちらでまとめるべきところお願いして申し訳ないんですが、よろしく願いいたします。

【佐藤座長】

はい、ありがとうございます。ICTツールを活用してというところでカレンダーはその中の一つなのでという感じかもしれませんね。余談でした。

あとほかにございますか。衣川委員いかがでしょうか。

【衣川代表】

はい、衣川です。自分からは2点あって、メモをチャットに書いて、それを見つつ話します。まず1つ目が4ページ目のところですかね。何が言いたいかというと、そこに書いてある上のところ、子どもたちの状況に最適な環境を選択することができる学習環境整備の内容に対して、心の天気のところの内容が寄り過ぎてるかなというふうに想像しました。バックキャスト的に2040年に向けて、大きな構想で描けてると思うんですけども、あの現場の問題に対する記載が減ってしまったかなと思ったので、例えば不登校とか子どもの幸福度とかの観点を踏まえて、例えば不登校、学力、関心のばらつき、多文化共生など今の子ども像を前提に、場所、ペース、方法を自分の気分スコアとAIがつなぐ。子ども自身が感情、学習ルーティンで最適な教室、学校だったり、家庭だったり、地域だったりオンライン、動画とかそれらを学べる、学び方を選べるような環境を整備する。ちょっと長いですけどここはちょっといい感じに縮小していただいて、こういう現状の問題も踏まえた書き方にするのが、一番上にもあるからいい形になるんじゃないかなと思いました。

【佐藤座長】

今のはどの部分ですか。ごめんなさい。

【衣川代表】

4スライド目の資料の一番上の子どもたちの条件最適な環境を選択することができる学習環境整備の矢印の部分を、現状の問題も踏まえた書き方にするという問題提起です。

【佐藤座長】

心の天気に関する記載ありましたか。

【衣川代表】

ないんですけど、自分の感情はどういう状態なのかというのが心の天気の話に寄っているのかなと解釈しました。

【佐藤座長】

なるほど。

【衣川代表】

つまり、子どもの状況っていうのは感情だけじゃなくて、あの学習状況だとか、学校に参画できる度合いだとか、そういう広く捉えた書き方にしてもいいんじゃないかなという意味合いです。

【佐藤座長】

感情というか、子どもたちの自分の状況、感情含め、どういう状態なのかということをもメタ認知できるということですかね。感情はとなると、心の天気ニアリイコールになるというイメージですか。

【衣川代表】

そうですね。いや、もう広く捉えていいのかな。

【佐藤座長】

なるほど。心の天気のみならずということでもんね。

【衣川代表】

はい。もう1点、最後とかになるのかなと思うんですけど、どうしてもこういう提言した時に、僕はKPIとか、スケジュールみたいなのが気になってきます。タイムラインも気になってきますと。もちろんそこまでここで提言するかなと思いつつ、ロードマップのイメージがないと、結局出来上がったものがそれでは遅いよねという形で、最初に岩崎委員とか提言したことに戻ってきちゃうんじゃないかなと危惧しています。例えば、いつどこで誰がいくらでというところまで書かなくとも、STEAMプレイグラウンドとか、NEO部活がいろんな形の今取り組みが出てきたと思うんですよ。これが進んでいく、もう進めなきゃいけないんだよと言えるような状態にするために、例えば、今年度3校で失敗を許す実験場を作って、さらに来年、再来年と30校で面白さが伝染するような状態にして、2030年ぐらいには大阪全市に広げていくみたいな形のメッセージが残ると、このスケジュール感でやらないといけないみたいなところが伝わるのかなと想像しました。以上、この2点です。

【佐藤座長】

ありがとうございます。1点目はいいですね。さっきのあの状態をメタ認知できるということですね。ロードマップに関しては、事務局と認識あってるかどうかですけども、ICTビジョンの中でロードマップを作成すると思われます。前回お見せしたものがICTビジョンだったので、対応するような形でロードマップが作られると思います。要は今回そこに向けた提

言という形で有識者からの意見を全部出しているという形になりますので。実際のところ ICT ビジョンのところどこが採択されていくのかというところが決まるわけで、それに合わせて予算やロードマップというのが作られていくという段階になるのかなと。この段階でロードマップやっぱり入れていくべきじゃないかというご意見でしょうか。

【衣川代表】

ロードマップまで書かなくてもいいんですけど、スピード感というのがちょっと伝わるようになるといいなと思って。例えば、コメントに書いたような文章、2025 年ではこれぐらいやっていっているところがあると、そこがロードマップを創るときにあのスピード感の共有ができるかなのかなという考えです。

【佐藤座長】

例えば、フェーズを4つに分けて、何年から何年までのステップ1については、例えばデータ基盤の仕様を考えると、あとはリテラシーの徹底的なものをとか、研修とか、そういった基盤的なものが入って、そして次の段階でこういう遊び場ができていくとか、要は遊び場が先にできてしまうと自律してない人たちができちゃってなかなか難しいことがあるかもしれないので、例えばですけど、ステップ2ではそういったものができてくるとかなんか大枠のものですかね。

【衣川代表】

そうですね。枠といえず、あの本当に簡単に、一年目はこれぐらいができて、二年目三年目ではこれぐらいの状態になっていっているところが、まあ、少しでも伝わるのが大事なかなと思っています。

【佐藤座長】

確かに時間軸はこの中に入らないですね。2040年のゴールのイメージですかね。

【衣川代表】

そうですね。例えば、少なくとも来年度でここを出たような新しい取り組みを3校でやっていくとかという狼煙を上げるぐらいはしときたいなと思いました。

【佐藤座長】

結構時間も無いところもあるので、そこまでいけるかどうか。事務局いかがですかね。

【田中課長】

ありがとうございます。まず一点目のところにつきましては、資料のところ、いただいたメモをベースに修正ができればいいかなと思っています。また、あの皆さんご確認いただければと思います。2点目のロードマップのところなんですけども、座長にもおっしゃっていただいたところもありまして、やはり具体的にどういう政策を取るのかというのは、行政的にビジョンの中で定めていく、有識会議の中です、いつまでにこれをすべしという位置づけにはできないという事情がございまして、ただ、2040年を議論いただいて、どうあるべきだということ、バックキャストでという趣旨もございまして、スピード感をもってやっていくべきという点はもちろんおっしゃる通りですし、ビジョンの中でも当然それを意識していくんですけども、もしそういったグリップを効かせる趣旨であれば、最後のページのところでキャッチフレーズを入れるということになったと思います。キャッチフレーズを入れた上で、これを目指すためにも、スピード感を持って今後取り組んでいってほしいとかですね、そういった表現であればいかがでしょうか。

【衣川代表】

そういう表現で構いません。

【田中課長】

ありがとうございます。差し障りがないという語弊がありますけれども、会議体の意見として支障がないような形でまとめさせていただきたいと思っています。もう1点、木村先生のお話にさかのぼって恐縮なんですけども、採用のところですね、採用試験の改革までかけるかどうか、皆さんのご意見ですので、意見として書くのは別に問題はないんですけども、ちょっと全体の表現の中でもう少し表現を考えさせていただきたいなと思っております。また皆さんにご確認いただければと思います。以上でございます。

【佐藤座長】

先ほど採用試験の改革までは書きすぎじゃないかというお話もしていたので、そういう直接的な言葉じゃなくていいと思います。あとロードアップについては本当に大事なんですよね。それがなくて魂が入ってこないとか、どうしていいかということになると思うんで、ICTビジョンの方も含めて、例えば2040年までであれば、残り15年ということですかね。5年ずつ3期に分けて、1期に関してはここまで、2期に関してはここまで実現する、3期に関しては、ここに書いてあることが今後実現しているという時間軸の提示というのは必要になってくるのかなと思いますが、最終的にあのこれだけのみならず、ICTビジョンを含めた形で、タイムラインについては、ロードマップについては載せていきたいと思っています。岩崎委員お願いいたします。

【岩崎教授】

よろしく申し上げます。資料の方ありがとうございました。拝見しながらですね、もし自分

が教育委員会にいるのであれば、これをどこでどれぐらい実現できるのかなという視点で見えていました。となると今、衣川さんがおっしゃっていたように、ある程度のロードマップというイメージもどこかでなければ、本当にこうあったらいいよねという形で終わってしまいそうだなと思うので、それがICTビジョンの方に細かく徹底されるのであろうかなと思いつつも、私も誰がいつ頃までにどうするのかというのはちょっと感じるころはありました。もう1点、ここに書いておかないと次に繋がらないので、少々書きにくいことでも、有識者の提言ですから、書いておくべきではないのかなと。例えば、教職員の採用試験についても、やはりそこから教育を変えていくという方法でもあると思うので、表現をふわっとして何かわからなくするよりは、はっきりとそこから切り込んでいくということを書くべきではないのかというのを感じたところです。自分がその政策を実現する部署にいたとした時に、こう書いてあるでしょというのが一つの手掛かりにはなと思うので、我々有識者の役割としては、そこをきちんと示していくところではないのかなと思ったので、今、そういうことを言っているということです。それを施策として具体的にできるのは学校ではなくて、やはり教育委員会の方々ですので、教育委員会の方々の背中を押すための言葉として、この提言に私は残していくべきものを残していく必要があるのかなと感じたところです。以上です。

【佐藤座長】

ありがとうございます。そうですね。改革については僕もどんどんやるべきだと思ってまして、採用試験も含めてなんですけど、今回採用試験というのがこの4回目に出たということもあって、例えば、木村先生がおっしゃっていたのは、学生時代の経験を重視する採用試験改革とおっしゃっていたんですが、それがいいかどうか、意見としては当然必要だと思うんですが、意見としてのせるといっていいと思うんですけど、経験を重視する採用試験の改革以外の要素もあるんじゃないかという議論が、時間切れでできなかったということから、会議体としての意見として、どこまでその全体の意見として入れていくのかというのは、時間切れじゃないかなということ、少しぼやかしたところがありました。ただ、木村先生の意見としては十分かなと思っています。どのように採用試験改革をしたほうがいいのかという岩崎先生のご意見はございますかね。

【岩崎教授】

採用試験がそうであるならば、やっぱり大学教育とかも変えていく必要があるんでしょうし、大学だけでそれはできるものではないと思うので、それこそ提言の中にもあるように、探究的な学習をより充実させていって、子どもたちが大学でさらに力をつけて教員になっていくという流れになればいいなと思います。私も教育委員会にいた関係で教員採用試験の準備とかもしましたけど、本当にこれで現場で戦えるのかなと思う試験もあつたりしたので、それよりも本当にやりたくないとぐずっている生徒にじゃあちょっと一緒に考えてみようかと寄り添える教員ってどんな力なんだろうなど。あなたどういう大学生活をしてきましたかと言った時に、どこかで覚えてきたようなセリフをとうとうとしゃべる人が本当に子どもに寄り添えるのかなと

でもそれしか測りようがないので、今そういう試験をしてきたと思うんですけど、そこを超えたものが経験の方から出てくるような試験がもしあるのであれば、木村先生がおっしゃっていることは本当にすごく共感する部分はあったので、だからといって具体的に何が今示せるかというところではないし、じゃあそれを公平に測ることが試験としてできるのかというところ

は難しさもあるんですけど。だから、今までの小中高大学としての個人のデジタルポートフォリオみたいなものを見せながら、プレゼンテーションするとかというような試験になるのかなというのは、なんとなく感じてたりはします。そうすると当然、デジタルのデータを個人で蓄積していくということになるのでICT基盤というのも絶対必要ですし、それを小学生から丁寧にやっていくことで、自分の学びの蓄積はすべてここにあるから、自分はそれを持って社会に出ていくんだというようなことを大阪のほうで進めることができれば、大阪で育った子どもたちは、自分の中にこういう実績、蓄積がある。それをほら見てください、私、ここまでやってきたんです、ここはすごく自分の強みとして持ってますというのが示せれば、その子にとってそれは一つの武器になったり、一つの自分の強みになって、その部分で幸せを感じることはできるのかなと思ったりした次第です。以上です。

【佐藤座長】

ありがとうございます。事務局いかがですか。

【田中課長】

今回のご提言のまとめとして、いろいろいただいた今後こうあるべき、こういうのができればいいというところはあるべき論としていただいて、佐藤先生もおっしゃったように大阪市としてどこまでできるのかというのは、また別のところもございまして、そういう観点からは今回、有識者な意見として記載するという趣旨でございますので、特に何らかの妨げがあるということではないですので、今回の議論を改めて議事録なりで考えてみまして、どういったエッセンスがいいのかちょっと考えさせてください。

【佐藤座長】

どこまで詳細をこの中で書けるかというのは、まだまだ時間不足だと思うんですけども、大枠で言うと、やっぱり創造性とか自律性に伴うような教員育成改革というのは必要だということだと思うんですね。その1つの要素として新しく入ってくる先生の採用という要素、あとはやっぱり教員の育成だったり、教員の変革だったり、教員の改革という、大枠でいうと、そういう意味になってきています。広義で言えば、さっきのティーチャープレーナーというところに関しても、ある意味採用も入れてもいいのかなんていうふうには思いますね。ティーチャープレーナーシップを理解したような先生が入ってこれるような仕掛けというのも、少し抽象的ではありますが、今後、教員の育成というのは絶対入ってくるわけですからね。ロードマップに応じて、おそらく予算や詳細なアクションってというのが決まっていくのかなと思います。

【田中課長】

事務局の方からまたちょっとよろしいでしょうか。

【中道部長】

失礼します。指導部長の中道と申します。先ほど教育長が退席する際に残されていたメッセージについてお伝えさせてください。ちょっと遡りますけれども、評価のお話、高岸先生からあった評価の話とか、それから発信の仕方みたいなお話があったタイミングなんですけれども、教育長がおっしゃっていましたのは、大阪で万博が開催中であり、会期が終わった後も、市長はレガシーという言葉をよく使っており、持続継続、どのようにこの万博を残していくのかというようなことをよくおっしゃられていると。それも絡めながら、ここで議論していただいている内容や、それから方向性、プランというようなものは、今後、教育委員会会議の場でも報告、発表されますし、そういった意味では、学校現場や保護者、それから広く市民にも大きく発信をしていくことになるでしょうと。マスコミももちろん取り上げることにありますので、その中で、様々な反応と言いますか、意見も含めて出てくることになるかなと。そういうことを大きく捉えながら、今後大阪市として、どういうふうに進めていくのかいうのを改めて考えていくことになるのではないかなということを最後残されていきましたので、お伝えだけさせていただきます。

【佐藤座長】

ありがとうございます。全体議論は以上となりますが、何か言い残したことがあるとか、もう少し言い足りないとかいうことがありましたらお願いします。

大丈夫ですね。そうしましたら事務局に戻いたします。

【田中課長】

すいません。最後に1点ですね。キャッチフレーズのところどうさせていただきますでしょうか。今いくつか案をいただいてましたけど。この場で決めていただくか。

【佐藤座長】

どう決めましょうかね。この中で何かありましたら。

【中島代表】

すみません、中島です。あの大阪市がどこを特に大事にしたいかかなと思っていて、おもしろいとかを入れるというのも1つ大阪らしくていいなと思います。答えがない時代になのか、何かを生み出すなのか、革命なのかとか、何かやっぱり最終的には大阪市としてこの方向で行きたいんだというのを選んだいただいて、キャッチフレーズにさせていただくというのがいいのかなと思いつつ聞いてました。大阪らしい雰囲気があってもいいかもしれない。

【田中課長】

5 ページの最後のところですね、ちょっと長いですが、予測不可能な未来に対応するためにはというところで、世界に OMORO!! を発信する大阪となることを求められる。ここに皆さんのこの間言っていたものをキャッチフレーズ的に詰め込んでたつもりなんです。これと、今日チャットでご投稿いただいたものから、事務局の方で一度整えさせていただいて、体裁、見え方も含めてご意見いただければと思いますが、よろしいでしょうか。

【佐藤座長】

そうするしかないですね。衣川さん、OMORO!! ってこういう意味でよろしいですか？

【衣川代表】

大丈夫です。良いと思います。やっぱり大阪市のみなさん自体がめちゃくちゃ面白い教育を作っていこうとか、こういう環境を作っていこうと思ってもらえるのが一番大事だと思いますし、その勢いが見えたらいいですね。

【田中課長】

最後に今日いただきましたご意見を踏まえまして、修正をさせていただくとお話してたんですけど、最後にそのポイントの確認だけさせてください。資料の1ページ目2ページ目については特にご意見なかったかと思います。3ページ目のところで、上段の右上のところですね。木村様の方からですね、チャット欄に投稿いただいておりますので、それを踏まえて修正をしたいと思います。右下のところは高岸委員と中島委員からいただいた内容をもとに、修正を検討したいと思います。ティーチャープレーナーの育成のところは、次の4ページ目の上段のところで記載をさせていただきたいと思います。探究学習やSTEAMを支えるような教員の人材育成、教員養成あるいは先ほどの採用のお話ですとか、ティーチャープレーナーであるとか、管理職のマネジメントの話であるとか、そういったことを1つ付け足ししようと考えております。もう1点ですね。衣川様の方からいただきました、上段のところですね。子どもたちの状況に最適などというところもそれにあわせて修正かなと思っております。

あとは、最後の有識者のメッセージのところですね。最後にこの5つ目のところを何らかのキャッチコピー、これをベースに考えさせていただきまして、2040年を目指して次期ICTビジョンの中でスピード感を持ってとかスピーディーとか取り組んでいただきたいとかですとか、そういった表現で修正をしたいと思います。今日いただいたご意見で修正点は以上かなと思っておりますが、抜け漏れ等ございますでしょうか。

【衣川代表】

大丈夫です。

【田中課長】

佐藤座長もよろしいでしょうか。

【佐藤座長】

大丈夫ですよ。

【田中課長】

資料の修正を行った上で、皆さんにご確認いただきたいと思います。お願いいたします。

今日の会議はこれで以上でよろしいでしょうか。

【佐藤座長】

そうですね。みなさん十分話したような顔されてますので、大丈夫だと思います。

【田中課長】

ありがとうございました。本日も皆様、活発な意見交換をいただきましてありがとうございました。では今回が本会議の最終回となりますので、最後に教育長に代わりまして、政策推進担当部長の松浦から一言お礼を申し上げます。

【松浦部長】

政策推進担当部長の松浦です。教育長に代わりまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日も活発な意見交換を賜りまして、誠にありがとうございます。先ほどもちょっと確認をさせていただきましたが、キャッチフレーズ含め、本日いただきましたご意見を踏まえた修正が、まだ残っておる状況でございますが、おかげをもちまして、有識者のご提言まとめという形でまとめることができたのかなというふうに考えております。感謝申し上げます。本有識者会議につきましては、昨年9月の総合教育会議で佐藤特別顧問の方から設置のご提案がございまして、横山市長からもぜひ開催をお願いしたいというご意見ございまして、開催の運びとなったというところでございます。3月18日に1回目の会議を開催いたしまして、そこから、本日2ヶ月と10日余りで計4回とちょっと詰め込んだ形での会議となりましたが、有識者会議のメンバーの皆様方におかれましては、年度代わりの、また万博開催期間という非常にお忙しい中、ご提言資料の作成や会議のご出席誠にありがとうございました。非常に内容の濃い会議であったと実感をしておりまして、毎回の会議を通して、皆様方の前向きな意見や様々なアイデア、視点に触れ、私自身もすごくわくわくできましたし、学びが楽しく豊かなものだというところ、再認識することができました。本会議でいただきました内容は、まずは令和8年度から実施予定の次期大阪市教育ICTビジョンに反映していくこととなりますが、本日もありましたように、委員会としてもスピード感を持って、しっかりロードマップ、スケジュール感をしっかり示しながら進めてまいりたいと思います。何より、本市の子どもたちがわくわくをしながら未来を開いていく能力を身につけられるような取組に繋げていければと考えているところでござ

います。有識者の皆様方には様々な場面で今後も引き続き、本市の教育行政にお力添えを賜うことができると考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。以上、簡単雑駁でございますが、本会議の閉会のご挨拶といたします。皆様、誠にありがとうございました。

【田中課長】

繰り返しになりますが、本日皆様からのご意見を踏まえ、資料を修正した後、メール等でご確認お願いさせていただきたく存じますので、よろしくお願いいたします。ご確認をいただいた後の最終版につきましては、7月29日に開催を予定しております総合教育会議におきまして、佐藤座長からご報告いただく予定でございます。それでは以上をもちまして、第4回次世代の大阪市学校教育ICTのあり方に関する有識者会議を終了させていただきます。冒頭申し上げました通り、本日の会議資料録画した動画、会議録につきましては、後日本市のホームページに掲載させていただきますのでよろしくお願いいたします。先ほどもございましたが、本会議につきましては本日で最後となります。有識者の皆様方におかれましては、お忙しいところ本会議へのご参加をいただき、また本社の取組のご尽力をいただき、誠にありがとうございました。今後とも本市の取り組みにつきましてご支援をいただけますと幸いです。

皆様、本日は誠にありがとうございました。